

『源氏物語』の「枕をそばだてて」

——恋いわびる独り寝の男君たち——

小山香織

白き衣どもの、なつかしうなよかなるをあまた重ねて、衾ひきかけて臥したまへり。御座のあたりもの清げに、けはひ香ばしう、心にくくぞ住みなしたまへる、うちとけながら用意あり、と見ゆ。重くわづらひたる人は、おのづから髪髭も乱れ、ものむつかしきはひも添ふわざなるを、瘦せさらばひたるしも、いよいよ白うあてはかなるさまして、枕をそばだてて、ものなど聞こえたまふけはひいと弱げに、息も絶えつつあはれげなり。

(柏木三四頁)(1)

柏木は、女三の宮の出家のことを聞き、「いとど消え入るやう」(三〇頁)に重態に陥った。その病床を、親友の夕霧が最後の対面に訪れる右の場面は、国宝源氏物語絵巻「柏木(二)」にも描かれて名高い。この絵巻に描かれた柏木は、直方体の枕を縦に立て、その上に頭を乗せている。これはおそらく、傍線を付した、「枕をそばだてて」という叙述と対応している。このためか、『源氏物語』の現行の諸注釈では、「枕をそばだてて」を、「枕を立てて」と解するものが多い。その一方で、「枕から頭をもたげる」、「寝たまま枕を斜めに持ちあげる」と解するものもあり(2)、解釈が定まっていな。以下、この「枕をそばだてて」ということばについて、『源氏物語』を中心に考えてみたい。

だったものを挙げれば、

①『全唐詩』には、「漱石枕流」を本来の語順にもどした「枕石漱流」と同じ意味の、「南京路悄然、敲石漱流泉」(巻五〇四・鄭巢「送人南游」)など、「敲」が、「人間が横になって寝ることを示す」例が多数見られること。

②同じく『全唐詩』には、「永日一敲枕、故山雲水郷」(巻五二六・杜牧「長興里夏日寄南鄰避暑」)、「永日還敲枕、良宵亦曲肱」(巻八四一・齊己「永夜」という例が見られ、これらの「敲枕」は、「長時間の睡眠に耐えるゆつたりとした姿勢を描写する」ものである。枕を傾斜させたままの状態とは考えにくいこと。『白氏文集』でも、「香鑪峯下……」詩の例に、「敲枕不視事、兩日門掩閑」(巻五「病假中南亭閑望」)、「捲簾眠初覺、敲枕看未足」(巻十一「東樓竹」)の二例を加えた三例とも、「のんびりと気ままに横になる安眠の姿勢」として解すること。

③埋田氏説によれば、「香鑪峯下……」詩の対句表現の「敲枕／撥簾」のうち、「敲」が自動詞、「撥」が他動詞となるが、このような例は、白詩以外の唐詩にも見られること。

④「人が枕に横になる」ことを示す詩語として、「側枕」があるが、「側」字は仄声であるので、これに対応する平声の字として、「敲」が用いられたと推測できること。

の四点になる。う。「敲枕」とは、より意味をとりやすく訓読するならば、「枕によりて」、あるいは「枕によこたはりて」と読むべき語だったのである。

(1)で、同じ「香鑪峯下……」詩頌聯の「撥簾」についても、原

一、唐詩における「敲枕」

「枕をそばだてて」とは、漢語「敲枕」(3)を訓読したものである。この語を用いた漢詩文のうち、日本でもっとも著名なのは、『白氏文集』の「香鑪峯下新卜山居草堂初成偶題東壁重題其三」(巻十六)であるといつてよいだろう。この詩の頌聯、

遺愛寺鐘敲枕聽 遺愛寺の鐘は枕を敲(そばだ)てて聴き

香鑪峯雪撥簾看 香鑪峯の雪は簾を撥(か)けて看る(4)

は、『千載佳句』巻下・山居、『和漢朗詠集』巻下・山家に採られており、中宮定子に「香鑪峯の雪はいかならむ」と問われた清少納言が、「御簾を高く上げ」て答えたという、『枕草子』(二七八段「雪のいと高く降りたるを」)(5)の挿話からしても、平安朝貴族社会の人口に膾炙していたことが伺える。

従来、この漢語「敲枕」についての解釈も、一定していなかった。

「敲」が、「傾／斜」の義を持つことは、和漢の古辞書類からみて確かであり、「そばだてる」という訓読も、おそらくは、「そば(稜)」を「立て」て斜めにする、の意味を持つ。それゆえ、「敲枕」を「枕を斜めに傾ける」ことだと解しても、それが具体的にはどのような動作・状態であるかという点で、「角枕であればその一稜を立てることによって高枕の状態を求める」(6)とする見解と、「眠れぬままに輾転反側するときに、おのずから生ずる枕の傾斜」(7)とする見解の両説が並存していたのである。しかし、後に埋田重夫氏によって、「敲枕」とは、「その傾斜する対象が実は枕ではなく人」であり、「人間が枕の上に側臥(横臥)している状態を示すに過ぎない」ことが明快に実証された(8)。氏の提示された根拠は多岐にわたるが、主

詩の意味から離れた訓読がなされていることが、夙に太田次男氏によって指摘されている(9)。「香鑪峯下……」詩の首聯には、

日高眠足猶慵起 日高く眠り足りて猶起るに慵(ものう)し

小閣重衾不怕寒 小閣衾を重ねて寒を怕れず

とある。寒さを厭って、重ねた暖かいふとんにくるまつたまま、「寝ながら棒のようなもので、ひよつとしたら足で簾をはね上げ」(10)たというのである。窓ガラスがあるわけではないから、簾を上げたままでは戸外の冷気が流れ込んできてしまう。香鑪峯の雪が一瞬ちらりと見えればそれでいい、という「慵」の情が、ここには表現されているのであった。なお、「撥簾」をこのような動作として捉えたとき、「敲枕」を「枕によこたわる」動作として解することの妥当性は、よりはっきりするだろう。

これに対して、『和漢朗詠集』の当該句の「撥」に付された訓点は、「カカゲテ」あるいは「マキアゲテ」が大勢を占めるという(11)。この「撥簾」も、より意味をとりやすくするならば、「簾をはねて」と訓読すべきところを、「かか／て／まきあげて」という訓が定着していたことがうかがえる。「遺愛寺鐘敲枕聽、香鑪峯雪撥簾看」の対句は、「敲枕」と「撥簾」の二箇所にわたり、原詩の意味が掴みにくい訓読によって、現代に至るまで享受されてきたのであった。

二、平安朝における「敲枕／枕をそばだてて」

前節では、唐詩における「敲枕」の語義をめぐる議論を紹介したが、この節では、『源氏物語』に「枕をそばだてて」ということばが用いられている背景として、平安朝における、「敲枕」、あるいは「枕

をそばだてて」という語の用いられ方を確認しておきたい。

まず、古辞書類では、『新撰字鏡』(二)の「敲」の項に、「不正也加太不久」とある。観智院本『類聚名義抄』(三)では、「敲」と「敲」が、「ソハタツ」の和訓を持つ。「敲」の項には、「敲字 ソハタツ」とあって、「敲」の和訓をみると「ヨル」とある。また、「敲」には「ヨル カタフル ソハタツ」とあり、これも「ヨル」とも訓読されている。少なくとも「敲」と「敲」とは、「よる」という意味も持つことが知られていたといえよう。なお、「敲」の和訓としては、「カタフク カチタリ アツカル」とあり、「敲」の項には、「傾也不正也」とある。

一条朝前後までの日本漢詩文では、「敲」字は、ほぼ「敲枕」のかたちで用いられており、それ以外の例で検索しえたのは、道真の岳父、島田忠臣の一例のみであった。

脆軟紅蘇蒂、敲垂蠟紫房 (『田氏家集』巻下「禁中翬麦花詩」)

この詩では、なでしこの花が首をうなだれているようすを、「敲垂」と表現している。「敲」字が「傾・斜」の意でとらえられていたことを示す一例であろう。次に、「敲枕」の用例を列挙する。

江頭亭子人事際 敲枕唯聞古成難

(『文華秀麗集』巻上・御製(嵯峨天皇)「江頭春曉」)

敲枕山風空肅殺 横琴溪月自逍遙

(『経国集』巻十三・太上天皇(嵯峨天皇)「山居驟筆」)

敲枕閑窓臥 微声石下泉

(『菅家文章』巻二「石泉」)

敲枕思量去日 我知何歳汝明春

(『菅家後集』「聞旅雁」)

伏願、……、早停閑白於庶幾、然則漳浦敲枕、臥秋月而照夢、

(『本朝文粹』巻四・後江相公(大江朝綱)「為貞信公辭閑白第三表」)
蜚声切切夜漫漫 敲枕還忘玉漏闌 (二)

(『天徳三年關詩行事略記』源順「蜚声入夜催」)

枕敲隣笛清商曲 窓対前林暗淡紅

(『新撰朗詠集』巻上・後中書王(具平親王)「秋夜」)

このように並べてみると、大江朝綱の例以外は、「敲枕」とは、ほぼ、何かを聴くときの動作として用いられていると解し得ることがわかる。嵯峨天皇の二例では、それぞれ、「雞」の声と「肅殺」たる「山風」を聴いている(二)。道真の二例は、『文章』では、「泉」の「微声」が聴こえたというのであるし、『後集』では、詩題に「旅雁を聴く」とある。大江朝綱の例は、「漳浦」とは福建省の地名であり、閑白を辞した後の気ままな暮らしを意味していると思われるが、はつきりしたことはわからない。源順の例では、「蜚声」(きりぎりすの声)と「玉漏」(宮中の漏刻)を聴いている。具平親王の例は、「枕敲」となつてはいるが、「隣笛清商曲」を聴いている、というのだろう。「商」とは中国の音階名で、「清商」は「秋風」の意を持つという。

こうした、「何かを聴く動作」としての「枕をそばだてて」の語の受容は、和歌においていつそう顕著である。

さむしろにあやめの枕をそばだてて聴くも涼しきほととぎすかな

(為忠家後度百首・深夜郭公・一八四・為忠)

暁とつげの枕をそばだてて聴くもかなしき鐘の音かな

(長秋詠藻上・述懷百首・維・暁・一八二／新古今集・維上)

そばだつる枕におつる鐘の音も紅葉をいづる峰の山寺

(拾遺愚草上・建保三年内大臣家百首・秋・古寺紅葉・一一三九)

ここで、俊成と定家の歌は、ともに「鐘の音」を詠みこんでおり、「香鑪峯下……」詩をふまえていることが明らかである。おそらく、彼らにとつては、「枕をそばだてて」ということが具体的にどのような動作を示すかということよりも、白氏の詩語を和歌にとり入れるということに主眼があつたのであろう。

あくまで推測の域を出ないことではあるけれども、「敲枕／枕をそばだてて」という語句は、「香鑪峯下……」詩の「遺愛寺の鐘は枕を敲てて聴き」という句によつて広く知られるようになったために、時代が下るとともに、「何かを聴く」という動作の慣用表現として用いられるようになっていったのではないだろうか。

ただ、「そばだてて」という語が、「枕」の語とは結びつかないとき、それは、「斜めに立てる」という意で用いられていたことが、やや時代はくだるが、

西坂より山へのぼるときは、身をそばだてて歩む。

(宇治拾遺物語巻五ノ四「範久阿闍梨西方を後にせぬ事」)

池水に駕鶴の剣羽そばだててつまあらしひのけしきはげしも

(新撰和歌六帖・をし・九三四・信実)

等の例から伺える。そのため、「枕をそばだてて」とは、「枕を斜めにする」ことであると捉えられていた可能性も、完全に否定することはできないだろう。

三、『源氏物語』における「枕をそばだてて」

『源氏物語』には、冒頭に掲げた柏木巻のほかに、須磨巻、総角

巻に、都合三例の「枕をそばだてて」という語句がみられる。一・二節をふまえて、それぞれの例について考えてみたい。

○須磨巻の場合

須磨には、いとど心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の閑吹き越ゆると言ひけん浦波、夜々はげにいと近く聞こえて、またなくあはれなるものはかかるところの秋なりけり。御前にいと人少なにて、うち休みわたれるに、独り目をさまして、枕をそばだてて四方の嵐を聞きたまふに、波ただこもとに立ちくる心地して、涙落つともおぼえぬに、枕浮くばかりになりけり。(須磨一九八頁)

引歌・引詩が随所にちりばめられ、文章が律動的に高く張った、須磨巻の山場のひとつとなる文章であるが、これらの引歌・引詩の多くは、政治的対立による流謫の情を醸し出すものとなっている。

「行平の中納言」とは、須磨巻の先行の叙述にも、「おはすべき所は、行平の中納言の、藻塩たれつつわびける家居近きわたりなりけり」(二八七頁)とあり、「わくらばにとふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつつわぶとこたへよ」(古今集・維下・九六二)が引かれていた。この歌の詞書には、「田村の御時に、事にあたりて津の国の須磨といふ所にこもり侍りけるに……」とあり、何かしらの政治的憂悶をかかえて須磨に蟄居するという行平像が、右大臣方との対立から須磨へと赴いた源氏に重ねられているのであろう(二)。また、「またなくあはれなるものはかかるところの秋なりけり」には、菅原道真が太宰府に左遷された後、配所に没するまでの詩篇を集めた『菅家後集』

の、「見るに随ひ聞くに随ひてみな惨慄、此の秋は独り我が身の秋となりたり」(随見随聞皆惨慄、此秋独作我身秋)、「秋夜」といった句への連想があるのではないかという(88)。そうだとすれば、「かかるところ」という叙述には、「風光明媚の地」というだけではなく、「流滴の地」という含みが読みとれよう。

そして問題の「枕をそばだてて」であるが、このような文脈のなかに於いては、「香鑪峯下……」詩が、白居易が江州に司馬として左遷された時代の作であることに注意せねばならないだろう。この詩の頸・尾聯には、白氏の流滴の我が身がうたわれていたのであつた。

匡廬便是逃名地

匡廬は便ち是れ名を逃るる地

司馬仍為送老官

司馬は仍ほ老を送るの官たり

心泰身寧是歸處

心泰かに身寧きは是れ歸處なり

故郷何独在長安

故郷何ぞ独り長安に在るのみならんや

しかしながら、須磨巻の源氏が「心泰かに身寧く」、「故郷何ぞ独り……」の感慨を持つていっているとはいいたい。ここではむしろ、「香鑪峯下……」詩の内容そのものよりも、「枕をそばだてて」ということばが、「香鑪峯下……」詩を媒介として、太宰府時代の道真が、江州時代の白氏に自身をなぞらえてうたった詩をも連想させることが重要なのであろう。

都府樓纔看瓦色

都府の楼には纔かに瓦の色を見る

観音寺只聴鐘声

観音寺にはただ鐘の声をのみ聴く

(『菅家後集』「不出門」／『和漢朗詠集』巻下・閑居)

『江談抄』第四には、この対句を引いて、「この詩は、鎮府にお

る」と「夜」が掛けられている。この「波のよるよる」とは、「住

吉の岸の白波よるよるは海人のよそめに見るぞ悲しき」(後撰集・恋

一・五六二・読人しらず)、「白波のよるよる岸に立ちよりてねも見し

ものを住吉のまつ」(後撰集・恋一・六〇〇・読人しらず)という歌に

みられるように、「毎夜の独り寝をかこつて泣き、あるいは毎夜で

も逢ひたいといふ恋の歌」の表現であることが、夙に石田穰二氏に

よつて指摘されている。また、石田氏は同じ論文で、「枕浮くばかり

になりけり」の「枕浮くばかり」が、「独り寝のわびしさ」をい

う恋の歌の表現であることも指摘された(89)。例歌を挙げておこう。

涙川枕流るる浮き寝には夢もさだかに見えずぞありける

(古今集・恋一・五二七・読人しらず)

涙川水まさればやしきたへの枕の浮きてとまらざるらむ

(拾遺集・雑恋・一二五八・読人しらず)

独り寝の床にたまれる涙には石の枕も浮きぬべらなり

(古今六帖・枕・躬恒)

こうした「波(の)よるよる」、「枕浮くばかり」という恋の歌の表現に違わず、須磨巻の源氏は、このすぐあと、

恋ひわびてなく音にまがふ浦波は思ふかたより風や吹くらん

(一九九頁)

という、都の女君たちを恋う歌をよむのであった。

ここで、ともに「枕」という語を含む、漢詩文からの引用である「枕をそばだてて」ということばと、和歌の表現である「枕浮くばかり」ということばとが、須磨巻のこの条では、なめらかに、つながりの文のなかに語りこまれていることに注意しておきたい。こ

ける「門を出でず」の胸句なり。その時、儒者云はく「この詩は文集の「香鑪峯の雪は簾を撥げて看る」の句にはまささまに作らる」と云々」(90)とあり、『大鏡』時平伝にも同様の評言がある。「香鑪峯の雪は……」と「都府の楼には……」のそれぞれの対句は、後者が前者をふまえたものであることが広く知られたうえで、並んで愛唱されていたことがうかがえよう。また、前節でも引いた『菅家後集』の、「枕を敷てて帰り去らむ日を重ひ量らふに、我は何れの歳とか知らむ汝は明春」(「聞旅雁」)も、流滴の身をうたったものであり、須磨巻と季節もあっている。「枕をそばだてて」とは、『白氏文集』と『菅家後集』の詩を、ともに連想させることばであり、ことに流滴の人としての道真を、源氏に重ねあわせていくような表現なのではないだろうか。

なお、須磨巻の後文には、「二千里外故人心」と誦じたまへる、例の涙もとどめられず」(二〇二頁)、「恩賜の御衣は今此に在り」と誦じつつ入りたまひぬ」(二〇三頁)と、『白氏文集』(「八月十五日夜禁中独直对月憶元九」)と『菅家後集』(「九月十日」)の句が、ともにはつきりと引用される。ここからふりかえつてみれば、「枕をそばだてて」とは、『白氏文集』と『菅家後集』のどちらをも連想させる表現として、「二千里外……」、「恩賜の御衣は……」の両句が源氏に吟じられることの、いわば予兆のような役割を果たしていたことがみえてくるのである。

ところで、須磨巻のこの条には、流滴の情を強調する引用がなされる一方で、恋の歌の表現も用いられている。「関吹き越ゆると言ひけん浦波、夜々はげにいと近く聞こえて」の「夜々」には、波が「寄

のことについては、次の柏木巻の項で述べる。

さて、須磨巻の「枕をそばだてて」については、源氏が具体的にどのような動作をしているのかは、よくわからない。「枕をそばだてて四方の嵐を聞いたまふに」とあるので、二節で推測したような、何かを聞くときの慣用表現として用いられている可能性もなくはないだろう。しかし、この須磨巻での「枕をそばだてて」ということばは、具体的にどのような動作を示しているかということよりも、『白氏文集』と『菅家後集』の詩を、ともに連想させるものとなっているということが、もっとも重要なのだと思われる。

○柏木巻の場合

柏木巻に「枕をそばだてて」とある部分を、もう一度引いておく。

……いよいよ白うあてはかなるさまして、枕をそばだてて、ものなきこえたまふけは、ひいと弱げに、息も絶えつつあはれけなり。(柏木三三四頁)

この例に関しては、須磨巻のように、『白氏文集』や『菅家後集』を連想させるものではないようである。夕霧のことばを聞く、という意味で、何かを聞くときの慣用表現として用いられている可能性もないではないけれども、「ものなきこえたまふけはひ」と、柏木がものを言うという動作にかかっている文勢からして、それは考えにくいだろう。だとすれば、やはり、何か具体的な動作を示しているのだろうか。それならば、「今年となりては、起き上ることをさをさしたまはねば」(三三三頁)、「烏帽子ばかり押し入れて、すこし起き上らむとしたまへど、いと苦しげなり」(三三四頁)と語られ

る重簾の人の動作としては、「枕を立てて」等と解するよりも、一節でみた、「敲枕」の原義である、「枕によこたわって」の意で用いられていると解したほうが適切であるように思われる。『白氏文集』に、相当に親しんでいたとおぼしい『源氏物語』の作者は、「敲枕」の原義を理解していながらも、通行の訓読を敢えて改めることはしなかったただけなのではないだろうか。しかし、これは何とも実証のしようのないことではある。

そこで、別の角度から考えてみようとするときに注意されるのが、柏木巻の冒頭近くに、須磨巻と同じ、「枕浮く」という表現がみられることである。

などかく、ほどもなくしなしつる身ならん、とかきくらし思ひ乱れて、枕も浮きぬばかり人やりならず流し添へつつ、いささか隙ありとて人々立ち去りたまへるほどに、かしこに御文奉れたまふ。(柏木二九一頁)

夕霧の見舞いの条の「枕をそばだてて」とは、この条の「枕も浮きぬばかり」と響きあつて、柏木がふせているのは、恋の病ゆえであることを強調する表現となつていてのではないだろうか。漢文訓読語である「枕をそばだてて」が、和歌的表現である「枕浮く」という表現とつながりうることは、須磨巻に明らかである。

いったい、和歌における「枕」ということは、涙に浮かぶ、と詠まれるとき以外にも、独り寝の恋歌にうたわれることが多い。

わが恋を人知るらめやしきたへの枕のみこそ知らばしるらめ

(古今集・恋一・五〇四・読人知らず)

よひよひに枕さだめむ方もなしにかに寝し夜か夢に見えけむ

有明の月のいとはなやかにさし出でて、水の面もさやかに澄みたるを、そなたの薙上げさせて、見出だしたまへるに、鐘の聲かすかに響きて、明けぬなり、と聞こゆるほどに、人々来て、「この夜半ばかりになむ亡せたまひぬる」と泣く泣く申す。

(椎本一八八頁)

「十二月の月夜の曇りなくさし出でたる」と「有明の月のいとはなやかにさし出でて」、「簾捲き上げて見たまへば」と「そなたの薙上げさせて見出だしたまへる」、「鐘の聲」「かすかなる」と「鐘の聲かすかに響きて」、「今日も暮れぬ」(88)と「明けぬなり」がそれぞれ対応している。

また、これもすでに指摘されていることであるが(88)、この総角巻の「世の人のすさまじき事に言ふなる十二月の月夜」、「簾捲き上げて見たまへば」という叙述は、朝顔巻の次の条と対応している。

「時々につけても、人の心をうつすめる花紅葉の盛りよりも、冬の夜の澄める月に雪の光りあひたる空こそ、あやしう色なきものの、身にしてみても、この世の外のことまで思ひ流され、おもしろさもあはれさも残らぬをりなれ。すさまじき例に言ひおきけむ人の心浅さよ」とて、御簾捲き上げさせたまふ。

(朝顔四九〇頁)

これらの、総角巻と朝顔巻・椎本巻の対応が、どのような意味を持つているのか、性急な判断はできないけれども、ここでは、総角巻の「枕をそばだてて」に対応することばが、朝顔巻・椎本巻にはないことをおさえておきたい。

それにもかかわらず、総角巻のこの条に、「枕をそばだてて」と

(古今集・恋一・五一六・読人知らず)
枕よりあとより恋のせめくれればせむかたなみぞ床中にをる

(古今集・雑体・一〇二三・読人知らず)

柏木巻の「枕をそばだてて」においては、「そばだてて」という漢文訓読語よりも、和歌において、独り寝の景物としてうたわれる「枕」ということばの方に眼目があるのではないだろうか。それは、柏木が、やがて恋ゆえに、「泡の消え入るやうにて亡せ」(89)てゆくことを、強調しているのではないかと思われるのである。

○総角巻の場合

雪のかきくらし降る日、ひねもすにながめ暮らして、世の人のすさまじき事に言ふなる十二月の月夜の、曇りなくさし出でたるを、簾捲き上げて見たまへば、向ひの寺の鐘の聲、枕をそばだてて、今日も暮れぬ、とかすかなるを聞きて、

おくれじと空ゆく月をしたふかなつひにすむべきこの世ならねば(総角三三三頁)

大君の没後、うつけたように宇治に籠る薫の姿である。ここでの「枕をそばだてて」は、「香鑪峯下……」詩の「簾を撥けて看る」に対応する「簾捲き上げて見たまへば」と、「遺愛寺の鐘」に対応する「向ひの寺の鐘の聲」との縁で、挿入句的に語りこめられているのであり、薫は実際に「枕をそばだてた」のではない。

この、「向ひの寺」とは、八の宮の臨終の寺であつた。すでに指摘されていることではあるが(88)、この総角巻の条は、椎本巻の八の宮の臨終の条と対応している。

いうことばが語りこめられているのは、柏木巻と同じく、薫が、大君を恋いつつ独り寝をしていることを、強調するものなのではないだろうか。薫はこのあと、

恋ひわびて死ぬるくすりのゆかしきに雪の山にや跡を消なまし(総角三三三頁)

という歌をよむが、この歌は、須磨巻の源氏が「枕をそばだてて」涙を流したのちによんだ「恋ひわびてなく音にまがふ浦波は思ふかたより風や吹くらん」(須磨一九九頁)という歌と初句を同じくしている。そしてまた、柏木も、「枕をそばだてて」、床に臥す以前のことはあるけれども、女三の宮ゆかりの猫に、「恋ひわぶる人のかたみと手ならせばなれ何とてなく音なるらむ」(若菜下一五八頁)とよみかけていたのだった。

『源氏物語』中三例の「枕をそばだてて」という表現のすべてが、それぞれ、源氏・柏木・薫という男君たちの、女君を恋いわびながらの独り寝——柏木は夕霧と対面してはいるけれども——の場面に用いられていることが、このことばの、『源氏物語』における性格を明らかにしているといえよう。

「敲枕」の語は、唐詩においては「枕に横たわる」の意を示しているものではあるけれども、日本では、「枕をそばだてて」と訓読されている以上、「枕をななめにする」ことだと捉えられていた可能性は否定できない。また、源氏物語絵巻が存在する以上、「枕を縦に立てる」の意に解されていた可能性も、やはり完全に否定することはできない。

しかしながら、『源氏物語』における「枕をそばだてて」ということは、具体的にどのような動作を示しているのかということ以上に、須磨巻では、流謫の人としての白氏と道真とを想起させることばとなっているのであり、須磨巻・柏木巻・総角巻の三例を通しては、女君を恋いわびる男君の独り寝の姿を印象づけることばとなっているのである。

注

- (1) 『源氏物語』の本文・頁は新編日本古典文学全集による。
- (2) 後述する須磨巻の「枕をそばだてて」の箇所につされた諸注を以下に列挙する。
 - 「枕から（頭を）上げ起して」（大系）。
 - 「枕をどうすることか、はつきりしない。……これ（隆能源氏）によると、枕をたてている。……ただし山岸博士は「枕より頭をそばだつ」意とする。工藤篁氏は、ねたまま枕を斜めにもちあげる意とする」（玉上評釈）。
 - 「枕から頭をもたげる。なお枕を立てる、寝たまま枕を斜めに持ちあげるなどと解する説もある」（全集）。
 - 「枕を立てて。床の上で頭をもたげるさま」（集成）。
 - 「角枕を立てること。枕を高くして寝るのは、頭部の鬱血を散じ、安眠を得るためである。源氏が眠れないことをいう。外の音を聞くために「枕をそばだて」るのではない」（新全集）。
 - 「枕を立てて頭をもたげて。（柏木巻の引用）その実態は、源

『芸文研究』一九七四年二月。なお、注8の中島氏論文が、太田氏の論を継承し発展させている。

- (10) 菅野礼行『平安初期における日本漢詩の比較文学的研究』（大修館書店、一九八八年）、六二二頁。
- (11) 注9前掲太田氏論文。
- (12) 京大学文学部国語国文学編『新撰字鏡天治本 附享和本・群書類従本』による。
- (13) 正宗敦夫編纂校訂『類聚名義抄』による。
- (14) 日本漢詩文の本文はそれぞれ、小島憲之監修『田氏家集注』、日本古典文学大系『文華秀麗集』、群書類従『経国集』、日本古典文学大系『菅家文草 菅家後集』、新日本古典文学大系『本朝文粹』、群書類従『天徳三年關詩行事略記』、新編国歌大観『新撰朗詠集』による。
- (15) 「還忘」は「還忌（かえりみる、はばかり）」の誤写かと思われるが、群書類従の本文に従っておく。
- (16) なお、嵯峨天皇には、おそらく「香鑪峯下……」詩をふまえたとおぼしい、「晩到江村高枕臥、夢中遥聽半夜鐘」（『文華秀麗集』巻下・御製（嵯峨天皇）「山寺鐘」）という作例がある。
- (17) 和歌の本文・番号は『新編国歌大観』による。
- (18) 新日本古典文学大系『宇治拾遺物語』による。
- (19) ただし、当該条の「関吹き越ゆると言ひけん浦波」とは、「旅人はたもと涼しくなりけり関吹き越ゆる須磨の浦風」（続古今集・羈旅・行平）ではなく、「秋風の関吹き越ゆるたび」と

氏物語絵巻・柏木が描く」（新大系）。

- (3) 「敲」字としばしば混同される字として「敲」、「敲」があるが、本稿では原則として「敲」を用いる。
- (4) 『白氏文集』巻十六の本文・訓読は新釈漢文大系により、巻五・巻十一の本文は那波本『白氏文集』による。
- (5) 『枕草子』の本文・段数は日本古典文学全集による。
- (6) 工藤篁「敲枕について」『中国語学』一九五八年三月。工藤氏論を支持する論に、戸川芳郎「枕をそばだつ」解（『国文学』一九六三年四月）、同氏「敲枕について」補論（『汲古』一九八八年十二月）、加固理一郎「白居易の「遺愛寺鐘敲枕聴」について」（『調布日本文学』一九九八年三月）がある。
- (7) 岩城秀夫「遺愛寺の鐘は枕を敲てて聴く」（『国語教育研究』一九六三年十二月）。
- (8) 埋田重夫「遺愛寺鐘敲枕聴」考——白居易の詩語が意味するもの——『中国文学研究』一九八八年十二月。埋田氏論を支持する論に、中島和歌子「白詩語「撥簾」受容考——菅原道真を中心に——」（『和漢比較文学』一九九四年七月）、松浦友久「遺愛寺鐘敲枕聴——白詩受容の一変相——」（『万葉集』という名の双関語——日中詩学ノート——）大修館書店、一九九五年）がある。また、松浦氏論文によると、現代中国語でも、同様の理解がなされているという。なお、日本古典文学大系『源氏物語』須磨巻の補注にも、「敲」は「倚る」の義があつて「そばだてる」の義は漢文にはない……とある。
- (9) 太田次男「白詩受容考——「香鑪峯雪撥簾看」について——

に声うちそふる須磨の浦波」（忠見集）を引いた表現ではないか、という指摘が『花鳥余情』にあり、石村正二氏が、その説をさらに補強しておられる（『源氏物語解釈のノオト（一）』

『解釈』一九五六年十月）。

- (20) 日本古典文学大系『菅家後集』「秋夜」補注。
- (21) 新日本古典文学大系『江談抄』による。
- (22) 石田穰二「枕浮くばかり」（『源氏物語論集』桜楓社、一九七一年）。
- (23) 「泡の消え入るやう」も恋の歌の表現である（注23石田氏前掲書『源氏物語における四つの死——歌語のことなど——』）。
- (24) 清水婦久子「秋風と鐘の声」（『源氏物語の風景と和歌』和泉書院、一九九七年）。
- (25) 「山寺の入相の鐘の声ごとに今日も暮れぬと聞くぞ悲しき」（和漢朗詠集・巻下・山寺／拾遺集・哀傷・一三二九・読人しらず）を引く。
- (26) 篠原昭二「風景の変貌」（『国文学』一九七〇年五月）。